

やまのこころ

てまぢまぢな動き、ななまの動き、
受とめ、自分となかまの
カとする。それがウリのゆきだ。

WR Iの仲間から送られてくるミニコミ・関係出版物を紹介するために、かぞえてみると五十数点になった。頁数の関係で、とても全部をのせきれない。それと、さまざまな内容があつて紹介のしかたもむずかしい。それで、ところかまわず内容の一部分を抜き書して、コメントなしでのせるということにした。順不同で編集にも何にもなつてないがおゆるしを。(やまだ)

※ 遺言 二号―反天皇誌―熊本県荒尾市宮内日岳九八二
「一九四五年六月十八日の大牟田空襲の直後であつた。私たちが右翼グループで、次の話が出、聞いた者は默契のように心の奥にしまいこんだ。「沖繩をジューリンした米軍は、やがて本土に上陸するだろう。大都市は焼き払われ、内地にはもう食糧はいくらもない。最悪の場合、

米軍と直接斬り合わねばならぬことになる。その前に戦鬪力にならない年より子どもは死なせておいて、心おきなくやろう」口をきった人にも子どもたちがいたし、私にもまだ小さな弟妹たちがいた。そうは言つても、オレは彼らを殺すことができるだろうか。―私は自信もなく心の奥に異和感を覚えたけれど、黙っていた。卑怯者と思われるのはイヤだったし、また殺しても殺さなくても米軍のためにみんなやられてしまうのだ。たぶんそう考えたのだつたらう。三十年平和になれた現在からみれば気違い沙汰としか思えないであらう。だが、天皇と国にもっとも忠実であらうとして、自分をこのような考え方に追い込んだことに間違いはない。そして更に私にとつて忘却できない理由は、それが沖繩の島々の一部で、天皇の軍隊の将兵たちによつて、実行されたということだ。私も老人子どもを殺しても戦うというのを拒絶しなかつたのだから、すでに心のうち殺人を犯していたと言われ

ても一言もないのだ。天皇絶対の教育と戦争心理にかこつけて免れようとは思わない。私が戦後この内奥の地獄に目をつぶって生きてきたのは、ただただ卑怯みれんの一語に尽きると思う。しかし今私は、自分の負い目を罪として肯うとき、天皇は本当に無罪なのかと問う気持がある。十五年戦争の時代を、いや撰政以来二十数年、政治と軍事の中枢にいて、天皇は何をしたか。一九四四年の春、天皇の責任回避を計画してから、翌年八月のポツダム宣言に対する「右宣言は天皇の国家統治の大権を変更するの要求を包含し居らざることの了解の下に受諾す」という降伏の意志表示をするまでの一年有余の間に、国内と外でどれほどの人が命を奪われ、傷つけられたか。また家々が焼かれ壊されたか。たかが天皇という一個の「非人間」のために、子を持ち親を持つ数百万の日本人朝鮮人、中国人、台湾人、東南アジア諸国の人々の生命が犠牲の羊として悪魔の祭壇に供されたのだ。このことは三十年経ったいまも声を大にして叫ばずには居られない。それは私が叫ぶのではない。焼夷弾をうけて犬のように地に転って死んでいた父の声がーいや、父たち、の声がかぶるのである。人殺し／＼人殺し／＼人殺し／＼と。

※ はんげき三号―反天皇情報紙―はんげき編集会議。札幌市鼻郵便局。私書箱二十八号。『戦犯天皇を糾弾する』天皇を頂点とするあらゆる差別を許さない／＼：ヒロヒトとその一族は国勢調査には記載されるが、戸籍簿には載っていない（戸籍法上の特例）。千代田区役所・税務課の都民税・区民税の対象者の中に千代田区千代田一番地として、ヒロヒトがあり、住民税を払っている。』

※ デパート日記五―個人通信―上村滋・東京都豊島区北大塚三の一二の五。『：仕事すまして、売場の中の階段をブラブラ下りていると、顔見知りの清掃のおじさんと顔を会わせた。おじさんは「うちらはヒドいよ、去年からもう十人近く減らされて、その上いまままで外に出してた分も経費節減でやらなきゃならないし、休んでるヒマなんかないさ。」「じゃ、これ」と首に手をあてると、「いや去年から定年制になってね、やめてくんだよ自然に、そして補充はしないと」という具合だそうだ。おじさんの働らくのは、このデパートの子会社で、ビルの電気機械関係のをぞいた管理をやっている。社員は、ほとんど四十代後半の再就職の人達だ。清掃がつまらない仕事とは考えない。でも何十年もの熟練がパアになってし

まうしかない再就職とは、そうするしかない人にとって
一体何なのだろうか。

※ あほりあ

四九号—個人通信—古瀬義夫・松江市北
堀町九二の二。「：学校という空間で、あたり前のこと
としてやらされていることを、やればやる程、僕のエネ
ルギーはしぼんでいく様に感じる。僕がやらなくなり、
言わなくなり、その結果、子ども達がやらなくなる。「
学校」という空間があまりにも「たてまえ」でかためら
れているからだろう。「地元の教師にだけは、なりたく
ない」という声をよく聞く。学校で見せている顔と私生
活での顔がちがうからに他ならないからだ。そこがおか
しいのだ。」

※ カラス

十七号—同人誌—八嶋潤・東京都江戸川区
春江町五の二三の一—二四。「：愛の近づくしるしは、息
吹く風の音がする、生の近づくしるしには、さかまく動
の音がする。自由の近づくしるしには、自立共存の声か
する。」

※ 共同体社会

(野中の一軒家改題) 八号—コミュニ

ン志願者の運動誌—共同体社会をつくる会・東京都府中
市朝日町一の五の四。「①^権威主義的Vユートピアは、
経済的な不平等を廃止しようと欲する限りにおいては進
歩的であったが、古い経済的奴隷制を、新しい形の奴隷
制に置き変えるものにすぎなかった。すなわち、人々は
自分の主人や雇主の奴隷ではなくなり、民族や国家の奴
隷となるのである。②ユートピアの市民は、同等の地位
にある人々に対しては、やさしく思いやりがあるのだが、
奴隷に対しては残酷である。彼らは国内においては平和
を愛するが、外国に対してはもったも無情な戦争を遂行
する。③^権威主義的Vユートピア国家は、変革や反乱
を考えるほど強固な独立的な個性の存在を、決して認め
ようとはしない。ユートピア国家は本質的に静的な存在
であり、より良いユートピアのために闘い、あるいはそ
れを夢みることさえも許さないのである。(M・ルイズ
・ベルネリ。ユートピアの思想史より) —ここでは「ユ
ートピア」という用語は正確さを欠き、適切ではないが、
一応①から③に至るまでの「ユートピア」という用語を
「キブツ」という用語に置き換えてみれば、明瞭となる。
①の民族と国家はそれぞれ「ユダヤ民族」「ユダヤ国家」
としてみればよい。言うまでもなく、私はここでは三一

才の若さで夭折したアナキストの女性闘士ベルネリの予言を引用して△キブツ▽と△シオニズム▽との腐敗。墮落したゆ着関係を批判しているのである。次に②の「奴隷」は「パレスチナ難民」を示し、「市民」とはもちろん「キブツニーク」をさす。最後に③はキブツが「反戦・平和」を基盤とした変革運動の拠点とならず、逆に自己完結の方向に収束してしまうのは△パレスチナ難民▽の多大な犠牲の上にその△コミューン▽の理想が築かれたためである。△キブツニーク▽の関心のまとは、今日では普通のユダヤ人同様、初期の頃の「変革」への熱情はうすれ、むしろ自分達の生活水準の向上や、余暇と娯楽の活用へと変ぼうしつつある。」

※ 生活者 五月号四十九号—個人誌—加藤彰彦。横浜市戸塚区田谷町一九三一。「以前にも書いたけれど、九州の出身で寺の任職・幼稚園の園長をつとめた人だが思うところあって、職を捨て釜ヶ崎をふりだしに日雇労働者になって全国を歩いている人である。その藤谷さんが、僕にこんな批判をぶつけてるのである。「寿に来るたびに思うんだが、ここの福祉は甘いねえ。大阪や東京に比べたら、あまりにもここは安易だと思っね。あんた福

祉を受けてる人間の生活行動を知っていますか。毎日ブラブラして、酒をのんで、ゴタクを並べているでしょう。そういう人間にしているのは福祉ですよ。」しかし、生活保護が急激にふえたのは、一昨年の不況からだった。仕事がなく、失業手当や、特出しの仕事もない中で、人はしかたなく体が悪いと言って保護をうけるしか道がなかったのである。そして、ついに寿の半数の労働者が保護をうけるようになった。それはしかたのなかったことではあった。そのことを藤谷さんに言うと、「わしは生活保護を少しも否定はしておらん。むしろ、ジャンジャンやった方がいいとも思っとる。しかし、それだけでは労働者はだめになる。もう一つやらにゃあならんことがあるはずだ。そりゃあ、労働者の立場にたった本当の教育だ。それが全くないというところに寿の甘さがある。福祉もやりっ放しだ。」僕には、日雇労働者が、自らの誇りをとりもどし、相互教育してゆくには、日雇労働者自身のまとまり、つまり日雇組合による以外は考えられないのだ。藤谷さんの言葉はこうつづく。「結局のところ、一人一人にわからせてゆく他ないなあ。話してわかる人、なぐられてわかる人、しかってわかる人、人さままだろうが、とにかく一人一人を変えてゆく他はない

だろなあ。それ以外にあんたらのすることはないよ」

※ 一羽のつばめ 二号—個人誌—古沢宣慶・市川市中

山三の八の三浄鏡寺。『…小西裁判に本格的に関わり出したのは、七四年になってからだ。私がかもとも感動したのは、ドウホポール教徒の抵抗に思いをはせる、次の箇所である。「国家って何だ。政府って何だ。自衛隊って何だ？彼らは「命令は絶対だ」と言う。命令って何だ、命令なら人を殺してもいいのか。命令なら何をしてもいいのか。いったい我々は何だ。犬か、ロボットか機械か？極東軍事裁判においては、上官の命令により捕虜を殺した軍人は処刑された。すなわち何よりも必要なのは、良心なのである。何よりも必要なのは人自分は個人はどうするかVということなのである。』たんなる反軍運動の問題ではなく、巨大な組織の歯車の中で、人間が人間として生きるには、何に拠るべきかを、この言葉は教えてくれていると思う。「何よりも必要なのは良心」「個人はどうするか」という叫びは、時間と空間を超えた普遍性をもつ。」

※ ピク パーソナルマガジン—山部嘉彦・東京都世田

谷区梅ヶ丘二の八の十一千春荘。『…「うん、自分を無にしてしまってるの。自分をスクリーンにして相手を見てみるの。だから、自分の意志を押しつけるのじゃないか。自我は凸なのよ。リップだって、あれだけ大きな運動にしたんではあるけれど、やっぱり欠けていると思うわけ。質的に。けど、じゃあ凹になろうと思わねえやな、やっぱり出てるのだけれども、その時、自分を無にするのね。それで相手を受け入れちゃって、呑みこんでそれから手応えするつつうのかね。それがわたし女だと思ってる。女の感性だと思ってるね。」「おれはこう思うね。かって田中美津が人抱く—抱かれるVから人抱く—抱くVの関係へと言った。」「うん、あれが凸凸なのよね。」「だけど、女の主体性というのは男の凸とは同じじゃないのであって、直さきに抱くというかたちでは表わせないんだ。つまり抱く—抱くじゃなくて、抱く—抱かせるじゃないのか。抱かせるという行為にこめられた主体性は深いと思うんだけどな。」「でもさ、ヴァギナはベニスを抱いてるんだとわたしは思うのね。ベニスは突くことはできても抱くことはできないじゃない。…ひとりの人間の中にも両方あるのね。だから二重シーン—でなければいけない。そうしないとシーソーはとまる。

だから突っこむという意味では能動だけれども同時に抱かれるわけじゃない。女は受入れるという意味では受身だけれども抱くという意味では能動なのね」……」

※ 人間改造 「金剛石改題」——新聞—金剛石社。名古屋市新栄町四。照運寺ビル二〇一号。『…去る五月十六日、天皇と皇后は東京国技館の大相撲を観に行った。東京新聞と中日紙は翌日、堂々写真入りで「天覧」と報道した。天覧、台覧、玉音、玉体のコトバは敗戦後の日本では廃句となっているし常識でもある。それが判って、乍らワザと編集局長に迎合してか或は、宮内官僚の指示か？』

※ 鹿島市民しんぶん——鹿島市民しんぶん事務局。茨城県鹿島郡鹿島町大字平井一一二九・鹿島更生園内。『…政府が新空港をつくろうとして十年たったが、まだ飛行機は一機も飛んでいない。その間、政府は新空港への交通手段について、まともに考えてこなかった。騒音をまきちらす成田新幹線を計画したが、これは当然住民の反対に合い、陽の目をみていない。また政府は、五万人と予想される乗客を定員六十名のバスで（空港—国鉄成田

駅間）運ぼうとしている。これは道理からはずれたことだ。交通ラッシュになるのは目に見えている。◆燃料を送る必要なし。こんなデタラメな計画の空港、飛べない空港には、そもそも燃料を送る必要はないのだ。しかもこの鹿島から町なかを通る鉄道を使って、燃料輸送する必要はない！』

※ ゲルピンパス ——個人紙—平田隆・神戸市葺合区宮本通二の三の一五。『…いっちよう、いくか。ひさびさに。先づ手始めは、例の三宮センター街東入口での、街頭うたいまくりを再開。これは毎月一〜二回、土曜日か日曜日。続いては、五月二、三日を利用しての東京行、街頭うたい。同じく、五月十五、十六日の「神戸まつり」には、デッチ上げ市民祭拒否の意をこめて、街頭無届けフォークコンサートとピラ配り。（ヨシヨシ、順調だぞ）六月中には、ミニコミ第七号の発刊と、第二〇回ちいさなコンサート。七月は、適当にあちこち歩きまわって……（行け行けーッ）』

※ 金沢反戦市民——新聞—金沢反戦市民社・金沢南郵便局私書箱二五号。『…△テレビを見ているだけというの

では「観客民主主義」という名のピエロではありませんか。△そんなことより労働者一人一人の直接行動で（黒いツバサに税金は払えない）世直し運動を腰をすえてやりましょう。△良心は道徳をつくるかも知れないが、道徳が良心をつくった証拠はない。」

※ 週刊ガリガリ

一号—学級通信—鈴木みちお・兵庫

県中栗波賀町立野尻小学校。『…父母であること—あなたは子供たちに愛を与えることはできるが、あなたのものの考えを与えることはできない。なぜなら、子供たちは子供たち自身のものの考えを持っているのだから。あなたは子供たちのからだの世話をすることはできるが彼らの魂は明日という住み家に息づいているのだから。あなたは、子供たちのようになろうとつとめてもよいが子供をあなたのようにしようなどとしてはいけない。なぜなら、人生は後向きにすすんでいくものでもないし、昨日のままにとどまっているものでもないのだから。（ペルシャの古い詩）』

※ 遊撃 六四号「さかさのイシ」—長谷川修児。東京都小金井市中町三の一二の二二。『…みんなととってもや

さしくて、あいそよく見えるけれど、どたん場にくるとかわってしまふ。明日「前日出勤」といって、入学式の準備なぞするために学校へ出ます。そこで、たぶん私は職場のみんなに「おはようございます」とか「春休みはあつという間にすぎてしまいましたね」とか言うでしょう。ニコニコして。でもその人達の半分以上大の人間がきのう校長室で、話し合いにやってきた△障害児Vといわれる子の親達に、どんな態度を取ったか。どんな顔つきでその親たちを見たか：』

※ すきのは

七号—機関紙—良心的軍事費拒否の会。

日野市旭ヶ丘二の三五の一八。『…私達は、税金をへらせ…といっているではありません。自分のオカネが人間同志の殺しあいに使われるのはガマンできない…といっているのです。「軍事費分」を積極的に生かしてつかうために、アメリカなどで広くおこなわれているのにならって、「平和といのちの基金」というのを考えました。保留したオカネは、平和のため、人を生かすために使われるべきものです。国がそのように使ってくれないなら、私達が方向を正して使おう。』

◆「おりぶのめばえ」これは実際の「軍事費」納入拒否

の仕方を扱った日本で初めての本。一冊三百円、二百二十円

※ 連帯 — 連帯新聞社。甲府市和田町二七一六一—一
『…一応定価一部五十円・毎号二千部印刷して、千部を郵便、千部を手配りしている。印刷代と郵便料で概ね毎月十万円近い出費である。塚田氏は決して財閥というのではなく、甲府一安いと言われる小さな食堂を経営してそのささやかな利益をこれに投入している。彼は「よっしゃばれ」ということを好んで口にする。人間は顔が異うように、それぞれ思想も性格もみな違う…そうした各種各様の人間が集って話し合い、討論するなかから共通点を見出す…それが社会変革の素地になる。—というのが彼の「よっしゃばれ」理論である。何か言いたい、何か書きたい、という人たちに発表の場を提供するのが、「連帯」である。』

※ ほんじやまあ 八号—個人通信—しのだおさむ。堺市高松一二二府管十三—三〇二。『ボクの助っ人日記—五月二五日（火）女解グループ「飛火」の「創林館」というところに出かけた。軽オフの印刷機があるとのこと

だったの、どんな機械で、どうやって使っていて、どのくらいかかるのかを見にいった。それから国鉄大阪駅前に来てきた丸ビルのすぐ近くにある、喫茶オメガを使ってみたくて、相談をかねて出かけた。その二階の空間を利用して、なかなか変わったところで、ついでに週刊ピ—ナツを置いて売れないですかと聞くと、それはいいですヨとなった。五月二十九日（土）刑法研究会連合が主催する「少年法々改正々について」五月三十日（日）小林知己さんの「こいうた」出版記念会。長野から来た東天紅さんに会った。五月三十一日（月）喫茶ヒグチにて東天紅さんを囲んで、部落差別の問題で、長野高教組とのやりとりを話してもらった。組織内（高教組）での個人の動きが、何故このようにおし殺されてしまうのかという問いは、常に今私たちがもち続けなければならぬでしょう。六月二日（水）三里塚闘争連帯大講演会。当日カンパを集めたのが、なんと二十万を軽くこえた。』

※ 会報 — 安保拒否百人委員会・まだ名前のない学校・川崎市西三田団地七—六一五〇—。河辺岸三氣付。『…をやるう』シリーズについて。面白くてタメになりそうなことは、オックウがらないで何でもやってみよう。

会) 例会「直接行動」合評会。六月十一日(金)午後七時(お寺にて、かぜの会は旭町WRIに対抗(?)して作られたWRIのメンバー、支持者などの会です。参加歓迎。』

※ 南上者 — 号外バンフー沖繩への韓国労働者徴用と
バイナッブル産業—那覇市開南局留・西村正志。『：四八年末に二千三百人いた南大東島の人口は、世帯数は同じだが、一年後は千七百人に落ち込んだ。』

地元労働者を補っているのが外国人労働力。沖繩には日中復交前には台湾、その後には韓国人がキビとバイン作業に導入された。ことしもキビ作業に七百四十七人の韓国人が来沖、両島には一月中旬に工場要員百八人(うち女三人)キビ刈りに四百一人(うち男二十三人)がやってきた。工場では、男子労働者の三分の一強が韓国人という依存度だ。

四畳半にザコ寝

二十四時間のフル操業

体制をとる製糖工場は、昼夜二交代の十二時間シフト。昼夜勤の交代日には、夜七時から翌日の午後一時まで十八時間働き放し。一月二十日から三十日までのある韓

国人労働者の総労働時間は四十二時間の深夜労働も含めて百九十六時間で、一日あたり十六時間余の重労働。時給三百円で賃金は四万五千五百円の勘定だ。「外国人非居住者なので税金を二〇%天引きされる。残った給料の大半は韓国の家族に送金する。」という。

工場が提供する宿舎は、コンクリートのローカを真ん中に、四畳半から六畳の部屋が両側に並ぶ長屋風の木造。入口や食堂に韓国国旗が掲げられている。板の間にビニールのゴザを敷いただけの四畳半に、三、四人がザコ寝する。便所と風呂場は、島の多くの農家と同様、屋外のトタン張り。このほど立ち入り調査をした沖繩労基局は「宿舎関係は広さなど労基法違反もあり、改善の余地が多分にある」と指摘した。

私生活も統制

工場で働く男子労働者は、徴兵制の関係で三十五才以上の中年が目立つが、キビ刈りの女子労働者は、全員二十才から二十五才までの未婚の娘さんたちだ。雇い主の農家に、二、三人単位で分宿、南国の強い日差しを浴び日の出から日没まで鎌を振るって一日十二キロ前後のキビの束を、四、五十束収獲する。娘さんの三分の一はソウル出身。地元の男でも大変なキビ刈りはきつそうだ。

日当二千五百円。工場と違い残業手当はつかない。

三食晚しやく付き、日当五千円でも、途中で逃げだす人が多い県内の季節労働者に比べて、低賃金のうえに統制のよくとれた韓国人労働者は地元の評判が良い。「韓国の人が来なくなったら製糖はできません。今後とも政府に陳情して当分は来てもらおう」と、北大東製糖の伊波事業所長。収穫機を導入、基盤整備を急ぐ地元も「安価な労働力」への誘惑を隠さない。朴政権の人力輸出政策の一環などとの批判も出ている中で、両島では千トン余りの粗糖が生産されている。

※ 亡羊 — 詩誌 — 「亡羊」の会・大津市大平二の三の一〇の四〇五・宮田正平方。「反古、誤植だらけの生活を拾いなおし組みなおし、いやもう自分でも数えきれないほどに、明日への校正刷りを塗りつぶして……」

※ 長征 二十二号 — 機関紙 — 徒人社・川崎市多摩区登戸七九五・長谷川気付。「立川テント村の反戦放送。……寄せ集め資材を使っていた、共同事務所であり、一人位は泊れる。児童遊園地の片隅で、自衛隊を金アミ越しににらんで、反戦放送を三年以上続行した。このバラッ

クが、立川市長が自民党市長にかわって間もなく、まってましたと計りに、留守にした夜半、放火されて焼失した。その日の朝、市吏員か、右翼か、ゴロツキか、警察官に守られた集団が、この焼きはらわれた家の周囲に張り込んでいて、焼かれたと知って急ぎかけたテント村の人達を近づくことさえせなかつた。家具調度もなかつた訳ではない、財産焼失であり、確実に放火であるが、この刑事犯である放火犯人を、警察はその後いっこうに探そうともしない。全然無関心でさえある。何かここにはナゾがひそみ、故意にやられたものと思えないが、もうすでにその時から何ヶ月も過ぎている。テント村の人達は、やむなく自動車上から自衛隊の衛門前で、反戦反自衛隊放送をやっている。と共にテント小屋の再建を求めて裁判中であるが、この裁判廷で被告の側の弁護士が共産党の地区委員とは、無良心無節操もここまでくると一寸あきれるが、仮りにも反戦運動の原告であるテント村の人達を、敵にまわして得々として恥とも感じないとは、まったくもって鉄面皮もいい所。」

※ 無辺光 第二号 — 同人誌 — 無辺社・豊中市豊南町南二の一の十・平井文化二F奥。「……その後、母と共に上

京して学校も転校しましたが、何分にもそれまでろくに学校へ行っていなかったせいで、六年生で既に知っているはずの九九を教えることも、ローマ字を読み書きすることもできない状態でした。そして、母子家庭だから、母子寮に住んでいるからという理由で教師から、級友から疎んじられ、差別されたのです。それは屈辱感をさらに根強く私の心の中に巣づけ、劣等感に輪をかけていただけでした。そのような私もどうか中学に入学できたのですが、それも小学校時代と何ら変らない差別の日々でした。そのころの母は、ニコヨンをしており、一ヶ月休まずに働いても六千円そこそこの給料で、私も学校が終ると八百屋に手伝いに行き、千五百円ほどもらっており、合わせて約七千五百円がそのころ私の生活費だったのです。：どうか薬品会社に入社もきまり、同時に都立高校夜間部に入学がきまりました。：母子寮から学校まで電車で三駅ほど有りましたが、私は往復三十円の車代がもったいなく思い、又、家のことを思うと電車代を使うことができませんでした。だから学校が九時に終るといつも歩いて帰っていました。

二学期も始まったある日、いつもの様に歩いて帰る途中で、私は後から来た車に無理矢理つれこまれ、大学の

グラウンドに引っぱり込まれて、数人の男達からなぐられ、着ているものを引き裂かれました。：私はグラウンドをたきながら相手の男達を恨むより、自分自身をのろいませした。貧しさを、昼間の高校に行けなかったことを、電車代も始末しなければならなかったことを。そんな自分を心からのろいませした。そうすること以外に自分のくやしき、みじめさをあらわせなかったのです。

いつしか私は学校にも、会社にも顔を出さなくなり、グレ始めました。非行にはしることであのいまわしいことから逃れようとしたのです。そうしているうちに私は不良少年、不良少女の中でいい顔になっていき、毎日毎日、ケンカ、睡眠薬にあけくれました。その結果、お決まりの保護鑑別所：：等と過ごしました。あのころの私は、そうすることによって自分の持つて生まれた定めを打ち破ろうとし、又総ての事に強くなろうとし、又、そう出来ると信じていたのです。：その様な私が、政治的に思想的に自分の生きざまを展開できる様になったのは、二五才になったころでした。人に対しては疑心暗鬼に自暴自棄になり、毎日毎日酒に酔いしれている時、ある酒場で知り合った青年によってだったのです。：
彼に導かれるように私はセクトへ入りました。数々

の作戦に参加しながら学習をしていきました。それが立派なマルクス主義者となり、革命家になれると信じておりました。しかし、アジトを点々としながら彼らと生活を共にしていくうちに、学生生活しか知らない彼らと、現実生活の醜さにもまれて生きてきた私との違いが事有ることに出来たのです。：たえず劣等感と屈辱感にさいなまれてきた私にとっての、革命とは、人間のために人間がやるものという信念は、人間性を無視した彼らとは、とうてい相入れられる問題ではありませんでした。

：彼らと別れて数ヶ月後に、私は逮捕されました。：早朝より深夜にいたるまでの過酷な取り調べに耐えて一ヶ月余りも過ぎた時分、今度は同志として最も信頼していた仲間達の内ゲバによる粛清によって、十数人の人間の死、その他色々の問題で気が狂いそうになり、留置所の畳の目を数えながら、毎日を過ごしたある日、私は一冊の書物を手に入れました。それは瀬戸内晴美の『余白の春』という小説でした。私はその小説によって金子ふみという女性を知りました。

彼女の一途な生きざま、そして権力者に最後まで媚びることなく自らの命を絶った、そのプライドの素晴らしさ、テロリズムを言葉では称賛しながらも、我命はおしいと

いう輩の多い中で、全ゆる意味において力をつけてくれました。：人間とは科学性をもっておし計れるものでもなく、又一つの思想の規律によっても屈従させるべききものでもありません。：人間とは何ものにも抑圧されることなく、差別されることなく、自由・平等・自然に生きるべきだと思っております。私は自分の生涯において、このような社会が実現するとは思いませんが、生きることによって、私の生活の中にこの考えを貫き通し、私の子供に伝えると共に私の生きざまにしたいとたく思っております。そうすることによって貧しいが故に差別され、抑圧されたあつころ、この世に生を受けた自分さえものろった日々が、私の子供達の時代にはなくなると信じて生きていきたいと思っております。：

※ 反民懇ニユース — 七月五日号 — 反戦市民運動懇談

会・東大阪市客坊町一二の一六・和田方。『反戦露天市八月八日午後一時頃より天王寺公園植物園前付近。反戦プラス反公害の大露天市となるかどうか。ピラ、ポスト、パンフ、古本、手作り品、その他なんでもあるものを持てるだけもって、天王寺公園に集ろう。』第二回反公害住民ひろばの展示会場で、一番目立ったのは反戦露

天市コーナーではなかったでしょう。もしアナタが多
くの人達に伝え、呼びかけたいことを持っているのなら、
私達と一緒に天王寺公園で店を並べてみませんか。反公
害運動は、ある一定の地域で展開される場合が多く、不
特定の人に効果があるかないか分らない呼びかけをする
ことは無駄なような気がするかも知れません。でも公害
は一定の地域に留まるものでなく、拡散している、いく
ものであることは御承知の通りです。そういう公害状況
に見合った方法として、天王寺公園での露天市がある、
と私達は自負しています。」

※ 世直し大学校通信 一号・大阪市北区北同心町二の
五・第二古林ビル二階・現代文化センター内。『世直し
大学・入学案内①』なぜ「世直し大学」であって「世直
し中学」でないかと云えば、ひとつはこれが義務教育ノ
でないからだ、という説もあるけれど、要するに既成の
「権威ある」大学へのパロディとして名づけられている
からに他ならない。もっともパロディということだけで
云えば、天才バカボンのおやしは「バカダ大学」の出身
だし、チェーン店の代表格であるミスタードーナツは
新入社員教育むけに「ドーナツ大学」を設立している。

両者はその中味が空洞である点においても、すでにきわ
だっていると云わねばならない。あるいは、防衛大学校
や経営大学校なども、主宰者が大マジメであるにもか
かわらず、というべきか、大マジメであるから：その分だ
け余計に、というべきか、立派な「大学」へのパロディ
であることは間違いない。つまり、パロディと云うとい
うのは、右のような例からキッコーマンの「奥さま大学」
に至るまで、例外なく、今日ある「大学」へのさまざま
なレベルからの無効宣言である、と受けとることができ
る。大学は、本来真理を探究する場であるのか、もとも
と体制に奉仕する管理Ⅱ支配のためのテクノクラート養
成機関として発足したのか、という議論したいが多くの
場合、まずスコラのなそれに属している……。：という印
象を受けるほど、今日、私たちの前にある「大学」は、
一方で営利的経営に委ねられており、他方で産学共同・
軍学共同への傾斜を強めている。かって反権力のトリ
デとしてうたわれた「大学の自治」はいまや有名無実化
し、「クリープのいれないコーヒーなんて、機動隊のい
れない大学みたいネ」という嘲笑に対しても、具体的な
事実をもって反撃できないありさまである。しかも
資本の多様な、その階級的延命への欲求にもとづく「大

「学」への期待は、東京大学―筑波大学を生み、その正統性を主張するために「受験地獄」を演出しているのである。とすれば、私たちの「世直し大学」はこの対極に位置しようではないか。七十年闘争のなかで試みられた全国の反「大学」、そして関西へ平連の「アンボ大学」の志を受けつぎ、労働のなかで学び闘おう!!」

※ 頭脳戦線

六月号―秋田市將軍野南一の二〇の二八
草階俊雄・VIVO社。「情報8平民詩人連盟―これはただ今こゝで、あなたとわたしとが形成している。連盟のしごとは、①自作他作いずれもトーシャ版印刷の誌紙ピラにのった詩が、卑語、俗語も活用した口語体で、笑いの伝統を生かしており、端的なものいよる指弾と信仰(糸)告白とが、それに大衆性をかくとくさせる、作者の無名志向性において行なわれていて、超国家のおもむきがあること。②この種の作者に平民詩人賞を献呈すること。正賞はこの趣旨表明、副賞ははるかにささげる敬愛のこころ。これまでに平民詩人賞をささげた人々は次のとおり●一九七五年十二月一日「あいかわみちこ詩集」とピラ詩のあいかわみちこ氏。詩集は私家版●「日

本反政治詩集」を編んだ人々に。同書は立風書房発行●「詞・詩・思」にまとめられ、その後も書きつづけられている。斗会氏●一九七六年五月一日、次の人々に平民詩人賞をささげたい。ドクターストップがかゝるまで時事川柳誌「東」を出しつづけてこられた一叩人氏●「遊撃」を出しつづけられ、「日本反政治詩集」の編者の一人にもなられた長谷川修児氏。」

※ 難破船

五号―らくがき愛好会・那覇市与儀五六七隣いぬ犬小があねワンワンワン―隣の犬がワンワンワンぬんちあんすかあびゆがひ―なぜあのようにほえるのかう国ぬ大将が来びたくと―エライお方がやって来て巡査やするて番しいが―巡査はそろって警備番

盗るぬ出してんかちみらん―泥捧出てもつかまえない強盗ぬ出してんかちみらん―強盗出てもつかまえない脳天脳天くふあちやぶる―ノーテンノーテン石頭人や人びとむるうなじ―人や人びとみな同じ

巡査や仕事んけ―忘れて―巡査は勤めをほったらかしやくとる替てあねワンワンワン―だから代ってワンワン

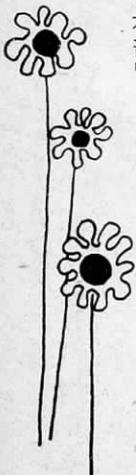


※ 無名通信 三八号—無名通信社・福岡市中央区小笹四の二〇の二〇。河野方。「…性をエロスでとらえるのは、形而上性にむけて走りこんでしまい、よりいっそう性の寂滅に誘いこむがごとき試みであるとも思える。性とは、類なるものが個体に強いしたたかな法則の貫徹であって、個体はひたすら自然を受容するしかなく、自然そのものの連続とみなすこともできる。だが、人間の自然を生物学的にとりだして、心性から行動にいたるまで、ゆるがぬ構造を展開することを試みれば、たちまち文明と社会の因子が強力な作用をなして、生物学上の構造そのものにも改変をせまる。人間とは、精神によって肉を喰わせる可能性を学んだ存在であり、精神と肉体とは、背反しあうかのような相をとりながら、根源の場で関連しあっている。だから、根源にむかって思いを深めるにしろ、文明の歪みを問うにしろ、エロスから出発するしかない場というものがあふ。」

※ 反公害ひろば通信 三一号—新聞—反公害住民ひろば事務局・大阪市北区神山町一三松栄ビル三階。「この三年間に三名の「視力障害者」が国鉄のホームから落ちて命を奪われている。一人歩きの「視力障害者」の二人

に一人は転落の経験がある。まさに死と背中合わせである。この様な駅構造が大原さんの両足を奪ったのであり、それは国鉄の「障害者」切り捨て、排除の差別姿勢以外の何ものでもない。これに対し国鉄は、三千円の見舞金でごまかそうとし、「個人の不注意による事故」としてもみ消さんとしている。これまで大原さんと私たちは、抗議行動や団交でもって糾弾闘争を展開してきたが、その場においても障害者の声を生かせば、一般乗客の迷惑になる等の答弁を繰り返し、乗客の中で分断を図ろうとしている。」

※ ザコニュース 二八号—個人紙—原子東梧・姫路市白鷺町五一。「ベルダンに行こう。若者よ夏休みをフランスで、世界の若者と交流しよう。国境・国籍を越えて戦争準備・戦争肯定・あおり行為を粉碎・拒否を行動で見せよう。コース・東部フランス・ナッツからベルダンへ約八〇キロ。日時・一九七六年八月四日～十日。問合せ、W R I 日本部」



※ くさ 二三号—個人通信—しのだもりの・神奈川県厚木市緑ヶ丘四の二の四一三。「おかみは主従をねんごろに食卓にいざない「おめえさま、どこぞで合戦にばし合いなされたように、よごれくたびれていなさるが、本当に戦いははじまるのかねえ。」とたずねるのであった。「これはわが敬愛する御婦人、まことによくぞたずねてくだされた。われらが日夜武事に専念するは、平和のためにござります。平和こそ人がこの世に求めてよい最大の幸福でござります。たしかにそれなくしては地上にも天上にも幸福はあり得ぬというたからものでござる。この平和こそは戦争の真の目的であり、なればこそわれらはひたすら武事に明けくれ戦争の到来を待つのでござる。戦さを起さねば平和を来らしめることはなりませぬ、何となれば平和こそ戦争の目的でござれば……」わが騎士はつかれとひもじさで目まいを超しかけながら、それでもいつもの長広舌はやめられなかった。二、三度サンチョは後から食事をしなせよ、いまにぶったおれなさるだ、あとでいくらしやべることはできるだ、と言ったけれど聞かなかった。……おかみさんは、まい日亭主になぐられたり、どなられたりしないためにチエをふりしぼるのだが、大ていの場合日に一度は、しゅら場

を演ずることになる。おかみさんはつくづく平和？というものがはしくなった。「だんな様、私は平和がほしいだ。都につれていってください。王様は兵隊をどっさりかゝえてござる。王様にたのんで大いくさを起し、大平和をつくってもらうだ。……」

※ かんらんしや

一八号—個人誌—岡村正幸・千葉市宮野木町一七二二の一。「市川市の市議会を傍聴してきた。一週間前に国会を傍聴してきたが、今度は国会のような面倒な手続きや身体検査はない。受付で住所・氏名を書くだけ。いかめしい衛士の姿もなく国会に比べてかなり親近感のもてる雰意気だった。しかし、あくまで比較の問題で、異和感の方が勝ることに変りはない。議場をながめまわして、まっ先に気が付くのは、保守系議員の欠員が多いこと。いてもほとんど寝ていること、野党議員の質問中なのに、なんと不真面目な／＼と思うのだが、よくよく考えてみるに、本当の政治というのは、官僚や黒幕が動かしているの、議会の機能などほとんど無力に等しいからだろう。彼らにひとあわふかせてやりたいと考えながら、官僚の「紋切り答弁」を聞いていた」



